

「第8回生物リズムに関する札幌シンポジウム」

— Jürgen Aschoff 教授追悼記念大会 —

北海道大学医学部統合生理学講座 安倍 博

今年の札幌の夏は、北海道とは思えない猛暑。いつもの年ならば2～3日しかない30度を超える真夏日が1ヶ月近く続き、めったにない熱帯夜が毎夜、クーラーを持たない私たち札幌市民を苦しめた。そんな酷暑の中、8月10～12日に、「第8回生物リズムに関する札幌シンポジウム」が北大学術交流会館で開催された。あまりの暑さに、避暑を兼ねて札幌に来られた参加者の方々も、目論見がはずれてがっかりされているようだった。

さて、すでにご承知の通り、本シンポジウムは隔年に札幌で開催される生物リズム研究のための国際シンポジウムで、今回で8回目を数える。毎回テーマが設定され、今回のテーマは「時を刻む脳」であった。また今大会は、昨年秋に亡くなられた Jürgen Aschoff 教授（北大名誉医学博士）の追悼記念大会として、Aschoff 教授に縁のある研究者も招かれ追悼講演を行った。

本シンポジウムでは、毎回、生物リズム研究において多大な功績のあった研究者に、本間財団より「本間賞」が送られる。今回の受賞者は、近年の時計遺伝子研究発展に大きく貢献した米国 Scripps 研究所の Steve A. Kay 氏に送られ、受賞講演が行われた。Kay 氏の講演は、未発表の新たな時計遺伝子の候補がいくつか紹介され、圧巻であった。

シンポジストは、日本から9人、海外から Kay 氏の他10人（基調講演者を含む）

で、遺伝子、細胞、組織、個体そしてヒトの各レベルでリズム研究に携わる研究者が招かれた。シンポジウムは4セッションに分けられ、それぞれ「時計遺伝子」、「同調因子と同調」、「サーカディアンシステムの複雑性」、「新たな方向」のタイトルのもとに、各シンポジストから最新のデータを含む興味深い発表がなされ、それについての活発な討論が行われた。印象的だったのは、最近の時計遺伝子研究のあまりの展開の速さに警鐘を鳴らしたり、また今後の展開についての考えを交えて講演したシンポジストがいたことであった。また、各シンポジストから、それぞれの研究生活における Aschoff 教授に纏わる逸話が紹介され、シンポジストの一人として招かれた Aschoff 教授の次男 Anderas Aschoff 氏も懐かしそうに聞き入っていたのがとても印象的であった。

基調講演は、Aschoff 教授追悼記念講演として、教授と縁の深い Serge Daan 氏、広重力前北大総長、Patricia J. DeCoursey 氏が、教授の功績を讃える講演を、懐かしい写真や手紙の紹介を交えて行った。DeCoursey 氏は、Aschoff 教授が40年前に撮影したガラス製のスライドを持参され、我々スタッフも貴重なスライドを壊さないようにと取り扱いにとっても緊張した。

懇親会は、サッポロファクトリー内にあるビアホールで盛大に行われ、できたてのビールと蟹をはじめとする北海道の味覚を

存分に味わって頂いた。ディナースピーチとして Aschoff 教授を偲ぶ講演を、Eberhard Gwinner 氏と Benjamin Rusak 氏にお願いし、懐かしい写真や手紙とともに多くの逸話が紹介された。Rusak 氏は 100 枚以上にもおよぶスライドを用意されたが、時間の関係上 80 枚にして頂いた。古い写真の中には、シンポジウムの参加者を含む現在の生物リズム研究の中心的研究者がほとんどすべて写っており、Aschoff 教授がこの分野に残した功績の偉大さを改めて認識させられた。最近の時計遺伝子研究に携わる若い大学院生の中には、Aschoff や Pittendrigh などいわゆるリズム研究のパイオニアが残した功績をよく知らない人もいるようである。しかし、今回の基調講演やディナースピーチを聴いて、我々はすべて彼らの発見したことを引き継いで研究しているということを改めて感じさせられた。

シンポジウムの最後に、本間賞選考委員長として長い間本シンポジウムに貢献されてきた Michael Menaker 氏に、主催者である本間研一北大教授、本間さと北大助教授より、その功績を讃え感謝し記念品が贈られ、シンポジウムの幕を閉じた。

今回のシンポジウムでは、文部省科学研

究費の補助を受けて、市民公開講座「生物時計と健康～あなたのリズムはだいじょうぶですか?～」を、シンポジウムの一環として 8 月 9 日に北大学術交流会館で開催した。生物リズム研究の基礎領域と臨床領域からそれぞれ 2 名の演者を招いて、「生物時計のしくみ」(井深信男・滋賀大)、「季節で変わる体のリズム」(本間さと・北大)、「睡眠と生物時計」(太田龍朗・名大)、「中高年の生体リズム」(大塚邦明・東京女子医大)について、一般市民にもわかりやすい講演が行われた。事前にこの公開講座の案内を新聞等に載せたこともあり、講演会前に家族に睡眠障害や不登校児をもつ市民から事務局あてに問い合わせが相次ぎ、当日は多くの一般市民が出席した。また、すべての講演の後に、聴衆からアンケート型式で質問を受け、それに対して各演者が答える質問コーナーを設けたが、やはり家族に当事者をもつ市民を含めて多くの出席者から質問が出され、生体リズムや睡眠に対する市民の関心の高さを認識させられた。また我々にとっても、生体リズム研究の社会的貢献について考える良い機会となった。